

やぶなべ

青森県立青森高等学校生物部 発行

誌名	やぶなべ
号/発行年/頁	8 / 1962 / 30-31
タイトル	青森県小中高生徒理科研究発表会
著者名	宅重豊彦

自然を見つめる やぶなべ会 (青森)

青森県小中高生徒理科研究発表会

1年 宅 重 豊 彦

空は青空。雲一つある秋空だ。まったく山へ行くには絶好のひよりである。それなのに、まあそれなのに、朝も早よから（8時）チャートをかかえ、知昭君と自転車に2人乗りしなければならぬのか、2人乗りなんて雑律で禁じられたことはやれないものだ。源ちゃん（小野先生）千葉先生に会うというし、青高裏のガタンピシヤ道を走ったため、かわいそうに知昭君はおしりにタコができたとか（これはうそ）。「チャート！」そうです。今日9月30日は年1度の（待ちに待った）県下小中高生徒理科研究発表会の日なのです。発表者は溶存酸素量による鳶沼におけるシヤジクモの補償深度調査「くああつかれた」の羽賀さん。昨年は動植両方の部門にそれぞれ1個の発表テーマをもったのだが、都合で今年は植物部門だけ。桃色じみた女性的な感じのする（でも男女共学）会場である青森商業学校についたが、他の学校の生徒がボサッと数人立っただけで、（シツレイラバイタシマシタ）当の羽賀さんの顔が見えない。でも僕が受付で話をしていたら今田さん、羽賀さんが右と左の足を交互に出して歩いて来て、受付を終え、（当日の受付に発表を申し込むのは我がクラスのジックスだそうだ。）弘大の教授である審査員連の紹介、大会長のあいさつの後、それぞれ発表会場へ、会場はちょっと狭い感じのする教室であるが、きれいである。やがて発表が始まる。植物部門の進行係は石川先生、僕は動物部門を傍聴。途中で下山先生がいらした。次に入賞作品をあけてみよう。ここでは物理、化学、地学の部門を省略いたします。

動物 1位 青森県トンホ類の消長について 弘前高

弘前市、津軽半島を中心とした県産トンホ類と、季節によるその発生、県内で採集の記録のない珍種の採集等としている。

2位 コヌリカの初期発生と2・3の生態的観察について 聖愛高

枝料としてコヌリ蚊を使っている。コヌリ蚊の卵を採集し、発生までの卵の変化とコヌリカの食物。結果としてくさりかけた果物（血はすわない）等である。

3位 ミミズの皮膚感覚 弘中央高

昨年の続編として出している。ヌトミミズを用い、体表を7箇所を選定し、電気刺激に対する皮膚感覚と神経の関係。結果として神経全体が傷つかぬ場合はどこかの神経節で程度感覚と運動を統一するが、体が傷つき神経に傷つくとその統一が破れ各神経ごとに独立して働くことがわかった。

植物 1位 溶存酸素定量による鳶沼におけるシヤジクモの補償深度調査 青高

やったぞ3年連続No.1、非常に長ったらしい題で閉会式の時大会長が四苦八苦して読んだほどだった。発表者の羽賀さんは、なかなか落ちついた態度だった。審査員から「立派だった。よくこんなにやれたものだ。」のお言葉あり。内容は本誌をさらん下さい。

2位 南八甲田黄瀬沼のフランクtonの調査 大三沢高

南八甲田乗鞍岳山麓にある周囲約1kmの黄瀬沼についてのフランクtonの発生、種類、結論として黄瀬沼はほぼ完全な栄養湖である。あと一歩つき進みがたらない感じ。これからの進歩が期待される。

3位 原形質流動の研究

找料としてドチカガミの根毛を使用。原形質流動が アドウ糖、塩類にどのような影響をうけるか。結果として根毛はPA 4.6~10.0 の間でいきていられる。アドウ糖溶液の中では24時間後も流動がみられる。NaCl以外の塩類は毒作用があることが判明。

余談を2、3個

開会式口に向う途中、〇〇君フロタラムを聞いてチョウの発表会があるのに気づき「今日太田さんくるのか」と今田に話しかけた。今田君前に弘中央高の太田裕子という人を知っているのだ「シー」 〇〇君何と思っつか「裕ちゃん来るの？」 今田君のあわてたこと限りなし。

開会式前昼食、近くの食堂に入ったが、ここが超大安、おしるこ15円とカレーライス10円も中華ソバ35円也。(金のない男曰く「この店スキスキスキ」)時間なくしすべり込んで開会式にのぞんだ。賞状伝達の時、連行係りの人が困った。僕の名前が読めない。しばらく考えた後「タクジュー」。 (あったまへきちゃったよ)

帰りは学校までタクシー。今日の参加者は、羽賀、今田、五十嵐、太田、中川、三上(知)、和田、僕、の男子と、ただ1人の女性滝本さんであった。3年に1度の青森大会なのだから、もっと多くの参加者を期待していたのに残念であった。しかし、有意義な1日であった。

我々はこの伝統を守り、そして後輩にうけつがなければならない。数多くの先輩のためにも!